

木村剛著「ビジネスの発想法」ナレッジフォア株式会社 2010年3月25日刊を読む

ミッションが正しいから売り上げが伸びるのです

## 1. 絶対善がエネルギーを生み出す

(1)「夢」を持って新しい分野へ積極的にチャレンジし続けなければ、会社にとっても、個人にとっても将来はありません。

(2)しかし新しい領域へのチャレンジは、技術開発にしる、市場の開拓にしる、非常に難しいものです。そこには経験したことのない障害や、想像もつかないような困難が待ち構えています。これらの障壁を打ち破るためには、ものすごいエネルギーを必要とするものです。

(3)そのエネルギーを発揮するためには、「絶対善」が必要です。

「自社は絶対に正しいことを行っている」と心の底から思えばこそ、とてつもないエネルギーが湧き出てくるのです。単なる「おカネ儲け」のためだけだったなら、強いエネルギーは持続しないでしょう。

(4)失敗する会社には粘りというものがありません。うまくいかなくなったときにすぐにあきらめてしまう性癖があるからです。つまり、努力はするのですが人並みの努力にとどまり、壁に突き当たると体裁の良い言い訳をつくって、自らを慰めて断念してしまうのです。

(5)無理だと考えられていることでも、粘りに粘ってやり抜いて、成功させるのが経営というものです。「自社の力はここまでだ」という固定観念があると、成功のために乗り越えなければならない一線を越えられません。

## 2. バッシングされなければ成功ではない

(1)ビジネスを大きくしていく際には、軋轢が必ず生じるものです。理不尽なバッシングにも遭います。大企業からも徹底的にいじめられます。

(2)そのビジネスが真に新しいものだったり、既存勢力のシェアを脅かすものであれば、間違いなくマスコミを含めたバッシングに遭う運命にあります。

(3)バッシングが起こらないようであれば、それは既存勢力にとって、真の脅威になっていないということにすぎません。ビジネスが本当の意味で成功していないことを示しています。

- (4) ビジネスを営むのであれば、あらゆるバッシングに耐えなければなりません。
- (5) 理不尽な仕打ちに耐える力を持っていないければならないのです。
- (6) じつは、そういうバッシングに耐える際に必要なのは、マスコミ対応などの小手先のテクニックではありません。必要なのは、「自分は絶対に正しいことを行っている」という絶対的な確信です。その確信があってこそ、理不尽なバッシングにも耐えられるのです。
- (7) そのためには、そのビジネスが世の中にとって正しいことであり、お客さまに喜ばれるものであるという揺るがぬ自信がなければなりません。そういう使命感がなければ、厳しい逆境に耐えていけないものです。
- (8) ここでいう使命感はキレイゴトではダメです。単なる理想論は、厳しい現実と直面したときに、あっという間に粉々に砕け散ってしまうでしょう。
- (9) 使命感は、心の奥底から願っている「夢」 - 「ミッション」でなければなりません。
- (10) あなたが、ある理想を抱いていたとしましょう。しかし、「そうは思うが、現実的には難しい」という気持ちが心の中にわずかでも残ってはいけません。それでは「夢」を成就できません。人は、自分が信じていないことに対して努力し続けることはできないからです。
- (11) 強烈な願望を描き、心からその実現を信じていることができるとこそ、困難な状況を打開し、ものを成就させることができます。

### 3. なぜミッションが必要なのか

- (1) ここで述べているミッションは決して、「お題目」などではありません。
- (2) ビジネスで成功するために欠かせないものです。
- (3) なぜならば、ビジネスというものは、ミッションが正しいから売り上げが増えて儲かるという仕組みになっているからです。その結果として、儲かるからミッションをさらに追求できるという好環境が生まれます。
- (4) ミッションがあるからこそ、経営者はリスクを背負い、決断し、心が折れないという心境に至れるのです。ミッションがあるからこそ、仲間が増えていくのです。ミッションという大義があればこそ、組織のエネルギーが高まっていくのです。

(5)したがって、自らが日々手掛けるビジネスは、「絶対善」を行う、社会的に意義深いものであるべきです。そうでなければ、ビジネスのツライ現場において耐えていくことはできません。

(6)多くの経営者は、ミッションの重要性を異口同音に唱えています。

(7)文房具大手のコクヨの社名は、「国誉 = 国のほまれになる」に由来しています。創業した黒田善太郎氏は、「商売の利潤というものは追求するものではない。利潤はその事業が社会に貢献することによって社会から与えられる報酬である」として一心不乱に事業に邁進しました。

(8)花王の創業者である長瀬富郎氏も、「天祐は常に道を正して待つべし」と社員に説いていましたし、わが国における株式会社の父と呼ばれる渋沢栄一氏も、「正しい道理の富でなければ、その富は完全に永続することができぬ」と語っていました。

(9)「自社は絶対に正しいことを行っている」という確信があつてこそ、ビジネスというものは永続し得るのです。確信がなければ、永続できません。

P153 ~ 156

#### [コメント]

ミッションの大切さを本音で語る木村氏のことばは胸を打つものがある。

- 2010年3月18日 林明夫記 -